ヒュームの情念論と前頭葉機能障害

真船 えり（Eri Mafune）

つくば国際大学

本報告は、ヒュームの間接情念論と前頭葉機能障害の事例を検討することにより、道徳判断を含む評価には、「考えること」あるいは認知とともに、「感じること」が必要不可欠であることを明らかにすることを目的とする。

ヒュームは『人間本性論』第三巻「道徳について」第一部「徳および悪徳一般について」第二節「道徳的区別は道徳感覚から引き出される」において、「道徳は、判断されるというよりは感じられるという方が適切である」と述べたことで知られる。「道徳的区別」とはヒュームの用語で、一般には道徳判断のことである。道徳は一般的には理性によってあるいは実践的推論によって判断されるとみなされている。ヒュームは『人間本性論』第一巻の冒頭で、人間の精神に現れる知覚を印象と観念に分け、「感じること」と「考えること」に区分した。この区分で言えば、道徳判断は一般には「考えること」によってなされるとみなされている。したがって正しく推論し理性的に判断することができれば、「感じること」は必要ないとみなされている。そのような理性主義に対してはヒューム自身やヒュームと同時代の他の哲学者たちが反論し、道徳判断は道徳感覚あるいは道徳感情によってなされると論じている。

本報告では、道徳判断が道徳感覚あるいは道徳感情によってなされるというだけではなく、ヒュームは、道徳判断を含む評価には「考えること」とともに「感じること」が必要不可欠であると考えているという解釈を提案する。この解釈の根拠となる論述は『人間本性論』第二巻「情念について」における間接情念についての考察として詳しくなされており、間接情念は第三巻「道徳について」においても言及され道徳判断と密接に関連している。

そして、ヒュームのこの考えは、現代の脳神経科学における前頭葉機能障害をもつ患者の事例に示されており、ヒュームの説を証明している可能性があるように見える。ダマシオの『デカルトの誤り』で考察されている前頭葉損傷患者は、知能や記憶力や合理的推論能力にはまったく問題がないにもかかわらず、個人的あるいは社会的問題とかかわる自分の問題については適切に意思決定できないことが記録されている。

本報告の目的を明らかにすることにより得られた結果は、前頭葉機能障害の遂行障害のリハビリテーションに応用可能であると考えられる。遂行障害における意思決定と遂行の関係に当てはめて考えることができれば、患者の支援のあり方にも何かしらの示唆となる可能性がある。

以上のように、道徳判断を含む評価の判断には、「考えること」とともに「感じること」が必要不可欠であるというヒュームの考えを明らかにすることは、道徳判断だけでなく、われわれの日常的な意思決定においても、「感じる」能力との連携が必要不可欠であることを明らかになり、評価と意思決定の理解に示唆を与えうると考えられる。